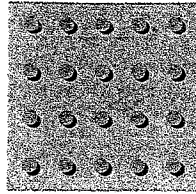


—我孫子の景観を育てる会—



景観あびこ

叙景

吉澤 淳一(会員)

叙景とは、風景を詩や文章に書きあらわす事、とある。我孫子に縁の文人墨客が書いた我孫子の風景「叙景」を、考えてみようと思う。これは、その1回目である。

「あびこ風土記」の或る頁で、こんな俳句が目にとまった。

「九年母(くねんぼ)や 沼に坂なす 我孫子町」 横手竹雨という人の句である。我孫子の坂を追い求め、坂のある風景や坂からの景観は元より、由来や名前など、坂に纏わる諸々を探検中の私にとって、この句との出会いは、衝撃的であった。手賀沼、坂、我孫子の三拍子が、たった十七文字の世界に凝縮され、迫ってくる。

さて、この坂は何処にあるのだろうか。

それは、九年母探しから始まった。まず、九年母とは、東南アジア原産の、蜜柑科の常緑低木であることが判った。多分、我孫子では珍しい木であろうから、見たことのある人がいるに違いない。「我孫子の文化を守る会」の三谷会長にお訊きすると、「白山の興陽寺で見た記憶があるが、今は無いのでは」と仰る。

高まる興奮を抑えつつ、興陽寺を訪ねると、果たしてその木は六～七年ぐらい前まで、境内に在ったと言う。本堂建直しの際移し変えたが、その後枯れてしまったようだ。百年ぐらい生きていた立派な木で、枯れる直前にはたわわに実がなったと言う。

さて、坂である。この辺り、沼へ下る坂は、今の公園坂通りと、ここ興陽寺の前の道を暫く行って、飯田医院の辺りから下り始める坂の二つである。公園坂通りは、昭和の初期に造られた道であると聞いているが、この句の作者についての資料が無いので、いつ頃この句が創られたのかは定かでなく、結論を求める決定打は欠けている。しかしながら、後者の道が、沼へ降りるメインストリートであったことから、興陽寺で九年母を見て、山門を出て右に歩を進め坂を下った、と考えるのが自然であろう。

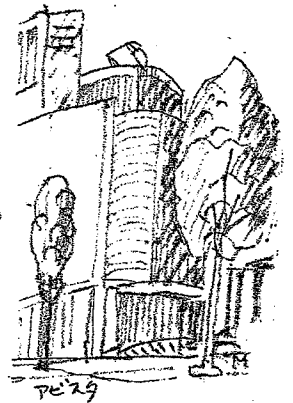
今この坂は、お世辞にも美しいとは言えない。無残な姿をさらけだして、可哀想な坂だ。路面は、継ぎ接ぎだらけで、狭い道幅にコンクリートの擁壁が迫る。坂の途中、六角堂の不思議な空間と、そこからの沼の眺望は消えてしまったのか。坂の下ではハケの道(根戸旧道)に突き当たり、塀の向こう、沼が見える辺りに、小さなビルが建っている。

我孫子の停車場から、水戸街道、興陽寺、根戸旧道、ご江間の渡船場に至る、美しく誇り高いあの坂は、何処へ行ってしまったのか。せめて、名前を付けてあげたい。

「九年母坂」か「六角坂」か。

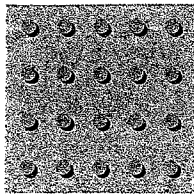
興陽寺の九年母は、愛媛出身の俳人[石田波郷]も詠んでいる。

「九年母や 我孫子も雪と なりにけり」 昭和十七年冬の作品だ。機会があれば、石田波郷全集の中の、「我孫子」を取り上げてみたい。



目次：

| | |
|------------|---|
| 叙景 | 1 |
| 部会から | 2 |
| 講演会のお知らせ | 3 |
| 川越市の都市景観シン | 3 |
| ポジウム所見 | |
| 第4回景観つくりシン | 3 |
| ポジウムのお知らせ | |
| 「景観を守る人々」イ | 4 |
| ンタビュー | |



部会から

Fグループ

吉澤 淳一

「我孫子の地形と景観」を考察するために、台地と水辺、そこを結ぶ坂道を歩き回って八ヶ月、Field studyのFグループは、今日も我孫子の何処かで、快適景観を求めて彷徨っている。

斜面林や谷津の自然景観、そこを辿るハケの道と坂道の織り成す素朴な風景、取り残されたような史跡に、発見の喜びがある。また、思いもかけない眺望に接して快哉を叫ぶ。一方で、痴漢に注意やゴミ捨てるなどの悲しい看板の乱立とごみの散乱、市民の森の展望のきかない展望台に心を重くする。

こうして、一步ずつ我孫子の景観を探り、やがては市民の皆さんと、景観の情報交流をしていく。そんな事を思いつつ、このグループは活動を続けます。

これまでの活動地域は以下の通り。

- 2月 利根川と布佐
- 3月 岡発戸の谷津
- 4月 新木から古戸に至る坂・ハケの道
- 5月 中峠の坂・ハケの道と芝原城址、岡発戸市民の森の2回
- 6月 久寺家・つくし野の坂・ハケの道、中里市民の森の2回
- 7月 緑～寿の坂とハケの道
- 8月 景観シンポジウム、まちなみウォッチングのプランニング

街並班 街並考 (1) 一街並に定義はないか

高野瀬 恒吉

フト、街角に歩みを止めたとき、何か、ジーンと胸に来る風景やハッとする光景に出喰わすと、思わず「いいなあー！」と心に語るときも有れば「何だ！これは？」と呟ることがある。

街角の環境が五感にあたえるものは、美しさ、と醜さ、ともう一つ汚さである。醜さには救いがあるが、汚さには救いようの無い不快感が伴うので頂けない。

さて、街角に面する街路の景観は「街並」にある。街並には、新鮮なものも有れば懐かしさ溢れるものなど様々であるが、簡単に古きものを再現して手を叩いたり、何所かの国のものを真似して、したり顔するのは論外である。こんな付け刃では風土に根づく美しい街並が生まれる筈が無いのである。

商店街一つとっても江戸時代、明治大正時代、そして昭和の戦前戦後の時代と、夫々に時代の風貌が備わっているから、眺めに美観を感じさせるのでしよう。

街並は時代の風潮を映して変遷してきました。「我孫子の街並」にも新しい世代に向けて新しき街並が描き改められて然るべきでしょう。かといって単純な模倣や思い上がりがあったっては為らないと思います。

我孫子には我孫子としての永い年月によって培われた土壌があるのですから、いきなり、いま在る街並に文句を付けたり、創り

替えようなどと大それたことは無理なのです。

因みに、街路に緑が無いのが殺風景だから、街路樹が欲しいと言っただけでは見ても、素直に聞いてもらえる環境にはないのです。反応が弱いのです。…地域の因習に拘ってか、解らないのか、解っているが動かないのか、それとも動けないのか…

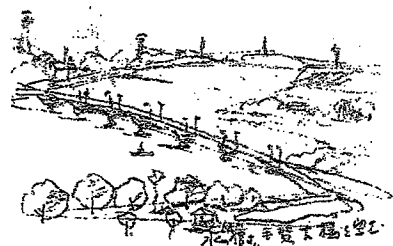
住民の総意と個人の創意と為政者の努力の噛み合いをみつけるのはなかなか容易でないものを感じます。

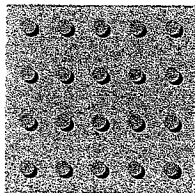
では、そんなら「街並はどうして誰が築いて来たのでしょうか？」「成り行きか？」「街並班」は悩みます。…「街並観」とは何なのか。と…

我孫子の住人が共有する[水と緑と鳥]に[人の営み]を融合させた街並、そこに独善的な人情が秘められているものとするなれば、如何なる名案であっても、短兵急には理想の街並を築くなんて至難の業でしょう。ましてやこの土地には「何が理想なのか」を極める事は出来ないのですから。

そこで、当面なすべき事は、理想を追いながら、既存の街並から「癒しを受ける街並を発見し、それを母体にして願望する街並の種を蒔き育てる」事にあるのではないのでしょうか。(続く)

#街並考についてのご意見お待ちしております。





我孫子市・「あびこの景観を育てる会」 共催講演会

水辺・ウォーターフロントでの景観づくりの考え方

日時 9月21日(土)10時～12時
場所 親水広場(水の館)3階会議室
講師 日本大学理工学部教授 横内 憲久 氏
内容 別紙チラシ参照

川越市の都市景観シンポジウム所見 高橋 正美(会員)

7月10日、川越市の市民会館ホールで、「2002・都市景観シンポジウム」が開催された。この催しは、川越市市政80周年を記念して、市と商工会議所が立ち上げたもの。当日は台風6号の接近で朝から雨が降っていたが、会場はほぼ満員の盛況で、約450名が出席、景観に対する市民の関心の高さが伺われた。

プログラムは、ミニコンサート、あいさつ、かわごえ都市景観表彰授与式、審査委員長総評、講演会ということで、パネルディスカッションや、ワークショップはなかった。

景観賞は、デザイン賞が4件、ポイント賞が3件表彰された。なお審査の際「まちかど審査会」を設け、市民の意見を取りいれている。

講演会は、俳優・旅のエッセイストで広く知られている渡辺文雄氏が、「居心地のよさ」と題して話された。その内容は、我孫子の景観を考えるうえで参考になると思われるので以下要約してご報告したい。

「川越市は、観光都市と東京のベッドタウンの二つの側面を持っている。この両面をどううまく適合するか、である。近年「まちおこし」と称して、なんでも新しくしようとする動きもある。これはソロバンの「ご破算で願ひましては」と同じでゼロに戻すことだ。日本人の悪いクセで、明治維新がいい例だ。川越は古

いまちであり、これを生かすことが、観光都市としてのあるべき姿だと思う。

そのためには、「置いてあるもの」を取り除いたり、「生えているもの」を抜いてしまったりしてはいけない。「育てる」ことが大切だ。それなりに時間がかかる。諺に「温故知新」という句がある。昔の物事から新しい知識なり、道理を見つけたことだ。

例えば、岡山県に「のれんのまち」と呼ばれている、住み心地の良いまちがある。一人の女性染色家の、個性的なのれんづくりが発端となって、まち中の商店や家にのれんが掲げられるようになり、生活にうるおいをあたえ、外から来る客を楽しませている。また、各地でまちおこしの一環として花いっぱい運動が行われているが、オランダの花の美しさは良く知られているところである。特に家々の出窓に咲く色とりどりの花が、実はキク科の花で虫除けのためのものであることは意外に知られていない。オランダの国土は低地で、水を風車で汲み上げているが、湿地で虫が発生しやすいという。

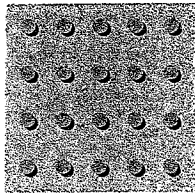
これに似たような事例は、日本の農村でもある。田んぼの畦道にヒガンバナが植えられているが、これは、モグラやネズミの被害を防ぐためである。

このように、昔からの生活の知恵を生かし、育てること、これが「居心地の良い」まちをつくることだ。



第4回景観づくりシンポジウム

日時 12月7日(土)10時～17時
場所 生涯学習センターアピスタ ホール
テーマ まちなみの景観 (詳細は次号でお知らせします。)



「景観を守る人々」～インタビュー～ 第3回 星野 保さん

インタビュー

『景観を守る人々』の第3回は我々の大先輩格になる、湖北座会の創設者であり、長く会長の任に当たられ、今なお、『美しい手賀沼を愛する市民の連合会』など、手賀沼と名のつく市民活動に深く携わってこられた、星野保さんをお願いすることにした。

80才を越され、すべての会長職は辞任されたというものの、この日(8月21日)も、手賀沼にマシジミやガシャモクが出て来たというので、その見廻りの途中、フィッシングセンターでのインタビューになった。(広報: 富樫、高橋、清水)

——ガシャモクが出て来てよかったですね

ここの橋のもとに偶然にもガシャモクが見つかった。ところが毎日新聞がスクープしたとたん、方々から大勢の人が取りに来た。素人でもきれいな水さえあれば育てられるので、その上、高く売れるらしい。

国土交通省との約束では今年の3月までの予算だったが、今年一杯まで延長してもらって、こっちの条件もつけて、ガシャモク再生の池を2つつくって、大事にしていこうと思っています。

——私たち景観を育てる会は、我孫子の現状を憂いて去年たちあがったものです。

それは私が今の市民の連合会の母体となった湖北座会が、昭和58年に発足したときの理念とまったく同じですネー。

経済発展で開発され、村の緑がなくなり、歴史や遺産がこわされていく。手賀沼は日本一きたないまま。湖北の子孫に残せるものは何もないといって立ちあがりしました。

中心になったのは村の中堅農家の旦那がた。村の歴史や現状を学び、未来がどうあるべきかを考える。そして何か行政に提案したいと。

現実の問題は手賀沼だと、毎月1回、研究、勉強したことを座談会形式で発表する。先生を呼んできてただ聴くだけの講演方式は取らなかった。ただ水質のことなどわからないことは、県の水質保存の先生に来てもらって話を聞きました。

これをまとめて、10年たって記念誌にして発表しました。これが柳田国男ゆかりのサミット賞を受賞した。

景観としては、あずまの生垣を残そうとか、神社の古木を残そうということでしょうネー。

——星野さんがこの活動を始められたのは、湖北の団地が開発された時ですか。

いやもつとあとです。工事が始まったのが昭和35年。入居したのは45年です。団地の中にも歴史、遺跡はありましたが、その後、団地の周辺の開発が始まりました。この周囲には多くの遺跡、神社があったのです。それが簡単にこわされていく。

いい例が新木の南側の開発です。あそこには水神さまが3つあった。それがみな消えてしまった。かまくら道もなくなった。

神社や古木を残して、それを公園にすればいいのに、別の所に移して、新しく公園をつくったりしている。

——反対する人はいなかったのですか。

市民それぞれが欲がつかって張ってた。パブルで畑を売った方がいい。山を売って金をもらった方が得だと思っていたのです。

はじめのうちは開発組合をつくって自分たちでやっていたものが、手に負えなくなってしまって、大手建設会社みたいなのところに任せてしまう。企業がやれば早い。

これからは市民の考え方が問題です。連合会でも方針を変えて、今年からは市民教育をすることにしました。パブルの時に育った人は使い捨てを平気でやる。これからは次世代をになう子供たちをアタック、関心をもたせるようにしようと思っています。

森には神やどるといったものです。壊すのは異状としか思えません。欲が先だった人は今はみんなダメになっています。

——会の運営について。

こうゆう活動には多くの、農家や商店の人を引っ張り込まなければなりません。地元の人です。

ところがこの地元の人はめっぽう先生に弱い。集まってみると右も左も先生ばかりが多くなる。そうなると地元の方は口を開かなくなります。そこで私は大学の教授でも議員さんでも先生と呼ばないことを宣言しました。

——長い間耐えてこられましたネー。

いつまでもしかたがない、しかたがないでは困る。私も初めから知識があったわけではない。座会で勉強にはげみ、体験することによってよくわかってきた。

会を運営する人は強欲では困るが、無欲でも困る。それから大事なことはホンネで話し合うこと。その為には国、県、市とあらゆる所の正確な情報を収集することです。

ケンカ腰では情報は集まりません。顔みしりになってホンネで話をすればわかってもらえるものです。

湖北小学校の空き教室に民具(農具)の資料館を作ってもらいました。教育委員会と学校との温度差はあってもホンネで話せばわかるものです。

今湖北座会の会長は農家の人で、古代米を子供たちにつくらせています。これは私も10年がかりでやってきました。

子供たちにご飯の食べ方を教えてやりたい。お母さんたちも残飯を簡単に捨ててしまう。座会では白いコシヒカリでは面白くないので、「赤米」をつくらせています。田植え、田の草とり、刈り入れ。無肥料で、手賀沼の水を使って、子供は興味を持ちます。

もちろん学校の行事とは無関係、我孫子よりも、遠く柏から来る子供たちも多い。

先生の中にもやる気マンマンの先生がいて、そうゆう所の子供は本当に一生懸命です。柏の学校などその体験学習を通じて、手賀沼浄化の研究で環境長官賞をもらったほどです。

——いろいろ夢のつきない話をありがとうございました。